

【予稿集】

大学図書館のオンラインビデオによる利用教育の現状と課題

長濱峻平
国際基督教大学図書館
nryohei@icu.ac.jp

日本と米国の大学図書館が YouTube で公開している利用教育動画の評価を行い、両者の評価結果を比較した。調査の結果、日本の動画には、「時間が長い」、「字幕を付与していない」、「図書館への問い合わせ方法を紹介していない」、「質問・発問・課題が少ない」、そして「大学の授業や課題に関わることに言及していない」という課題があることが明らかとなった。

Current Status and Issues of Online Library Instruction Videos in Academic Libraries

Ryohei NAGAHAMA
International Christian University Library

1. 背景と目的

大学教育の質的転換に伴い、大学図書館における利用教育の必要性が高まっている。近年では、利用教育の動画をオンラインで提供している図書館が増えている。本発表ではオンラインで提供される動画を「オンラインビデオ」と述べる。

わが国においても数々の実践報告がなされているが、その多くは単なる報告に留まり、良い利用教育動画に求められる条件の考察や、オンラインビデオの質を評価した研究は少ない。そこで筆者は、良い利用教育動画の諸条件を明らかにすることと、オンラインビデオによる利用教育動画の実態と課題を明らかにすることを目的に調査を実施した。本発表では、この調査のうち、YouTube に公開されている日本と米国の利用教育動画の比較調査についての結果を報告する。なお、本発表では、インストラクショナルデザインの考え方に基づき、「教育活動の効果・効率・魅力」[1]を含む動画を「良い利用教育動画」と述べる。

2. 方法

まず、ウェブサイトやオンラインビデオによる図書館利用教育に関する先行研究を収集し、良い利用教育動画の諸条件のリストを作成した。次に、作成したリストに基づき、動画の評価指標を作成した。そして、評価指標を用いて、日本と米国の利用教育動画の評価を実施し、評価結果を比較した。調査期間は2021年1月23日から2021年1月31日までである。調査対象の動画は、YouTubeの、大学図書館と大学の公式チャンネルで公開されている動画のうち、OPACとデータベースの使い方を主題とした、日本の動画74本と、米国の動画90本である。前者は「OPAC」、「データベース」等のキーワードを用いて、網羅的に検索を行い抽出した。後者は「catalog」、「database」等のキーワードを用いて、上位に表示された動画を抽出した。

3. 結果

評価指標および各指標の調査結果を表1に示す。「動画の時間が3分以内である」、「大学の授業や課題に関わることに言及している」、「音声が使われている」、「母国語の字幕がある」、「質問・発問・課題がある」、「図書館への問い合わせ方法に

言及している」は、日本よりも米国の方が5ポイント以上高かった。

「母国語の字幕がある」は、日本が6.1%なのに対し米国が69.3%と、米国が大きく上回った。また「図書館への問い合わせ方法に言及している」は、日本が2.7%なのに対し米国は62.2%と、こちらも米国が大きく上回った。

ここで動画の時間についてより詳しい比較を行う。「動画の時間が3分以内である」は、日本が35.1%なのに対し、米国が44.4%と、米国の方が9.3ポイント高かった。各動画の長さを調査したところ、平均値は、日本が4分18秒04なのに対し、米国は4分39秒29と、日本の方が約21秒短かった。ただし、最も長い動画は日本が20分48秒であるのに対し米国は56分27秒であり、この1本の動画が米国の動画の平均値を押し上げていた。中央値は、日本が3分57秒なのに対し、米国が3分12秒と、日本の方が45秒長かった。

4. 考察

調査結果より、日本の大学図書館のオンラインビデオには5つの課題があると言える。一つ目は動画の時間が長いことである。日本の動画は、冒頭での概要および目標の紹介、終盤での動画内容の要約、具体例を用いた説明、専門用語の簡単な言葉への置換など、説明の丁寧さにおいて優れている一方で、丁寧過ぎるために動画の時間が長くなってしまいう傾向にあると推察される。視聴者は短い動画を好む傾向にあり、複数の研究者により、動画の適切な長さは3分以内であると主張されている[2]。また動画の時間を短くすることで、制作時の編集の手間が少なくなるという利点もある[3]。要点を絞った説明を行う、長い動画は複数の短い動画に分割するなどの工夫が必要である[4]。

二つ目は、字幕を付与している動画が少ないことである。日本の動画は、母国語(日本語)字幕、外国語字幕ともに付与されている動画が著しく少なかった。一方、米国の動画の多くには、母国語(英語)字幕が付与されていた。米国では1980年

にクローズドキャプション方式が開発されて以来字幕付与が拡大し、現在ではテレビ番組のほぼ100%において字幕が付与されている[5]。またFederal Communications Commission(FCC)により、地上波、ケーブル、衛星、インターネットでのテレビ番組への字幕の付与が義務付けられている[6]。インターネット上の消費者生成メディアは対象外ではあるが、字幕をめぐる背景や制度により動画には字幕を付与するという意識が一般的になっていることが、米国の字幕付与率が高い要因であると推察できる。字幕は、障害者に限らず、日本語を苦手とする留学生や、「聞く」よりも「読む」ことを得意とする視聴者にとって有用である。

三つ目は、図書館への問い合わせ方法を紹介していないことである。問い合わせ方法を紹介することで、疑問が生じた時に図書館に質問することが可能になる。日本の図書館の多くが問い合わせ方法を紹介していない理由として、オンラインビデオを対面型の講習会と同様のものとして捉えていることが考えられる。対面型の講習会では、あえて問い合わせ方法を紹介しなくても、参加者はその場ですぐに質問をすることができる。しかしオンラインビデオの場合は、近くに図書館員がいるとは限らない。質問のためにカウンターを訪れたり、メールで問い合わせたりということが必要となるが、その場合カウンターの場所やメールアドレスがわからなければ質問することができない。よって対面型の講習会の時よりも、意識的に問い合わせ方法に言及する必要がある。

四つ目は、質問・発問・課題が少ないことである。質問・発問・課題を動画の途中に組み込むことで、視聴者のモチベーションが高まる[7]、視聴者に内容がより定着する[8]、視聴者の自信や満足感が高まる[9]などの効果があるとされる。しかし質問・発問・課題を加えることで、動画の時間は長くなる。課題に対してはフィードバックをすることも推奨されるため[10]、それらを全て含めようとすると、より動画の時間が延びてしまう。解決策として、例えばクイズは動画内で提示して、フィードバックは別ページにリンクをするという

ことが考えられる。

五つ目は、大学の授業や課題に関わることに言及していないことである。利用教育は、学生が授業や課題にすぐに役立つと感じた時に、最もよく受容される[11]。動画内容が授業や課題のどのような場面で役立つのかに動画内で言及することで、視聴者に内容が定着しやすくなると考えられる。

5. 今後の課題

本調査では、評価の観点動画の長さや構成といった形式的なものに留まり、内容の評価にまで及ばなかった。また、あくまで先行研究で良いとされている条件を満たしているかを調査しただけであり、視聴者の学習効果を調査することはできなかった。より良い利用教育を推進していくために、今後内容の評価や効果の検証も実施したい。

注・文献

- [1] 高橋暁子, 根本淳子. “インストラクショナルデザイン(ID)とは何か”. 大学授業改善とインストラクショナルデザイン. 松田岳士, 根本淳子, 鈴木克明. ミネルヴァ書房, 2017, p. 3-15.
- [2] Slebodnik, M.; Riehle, C. F. Creating Online Tutorials at Your Libraries: Software Choices and Practical Implications. *Reference and user services quarterly*. 2009, vol. 49, no. 1, p. 33-51.
- [3] Plumb, T. K. Creating Electronic Tutorials: On Your Mark, Get Set, Go. *Journal of Electronic Resources Librarianship*. 2010, vol. 22, no. 1-2, p. 49-64.
- [4] Bowles-Terry, M.; Hensley, M. K.; Hinchliffe, L. J. Best practices for online video tutorials in academic libraries: A study of student preferences and understanding. *Communications in*

Information Literacy. 2010, vol. 4, no. 1, p. 17-28.

- [5] 福島孝博. 映像情報メディアのアクセシビリティ 3.テレビ字幕とアクセシビリティ. *映像情報メディア学会誌*. 2015, vol. 69, no. 9, p. 689-692.
- [6] “Closed Captioning on Television”. <https://www.fcc.gov/consumers/guides/closed-captioning-television>. (参照 2022-5-23) .
- [7] Merkt, M.; Weigand, S.; Heier, A.; Schwan, S. Learning with videos vs. learning with print: The role of interactive features. *Learning and Instruction*. 2011, vol. 21, no. 6, p. 687-704.
- [8] Rice, P.; Beeson, P.; Blackmore-Wright, J. Evaluating the impact of a quiz question within an educational video. *Techtrends*. 2019, vol. 63, no. 5, p. 522-532.
- [9] 佐藤満明, 柄本健太郎, 向後千春. 講義動画中におけるクイズの提示が受講者の学習意欲に及ぼす効果. *日本教育工学会論文誌*. 2015, vol. 39(Suppl.), p. 77-80.
- [10] Oud, J. Guidelines for effective online instruction using multimedia screencasts. *Reference Services Review*. 2009, vol. 37, no. 2, p. 164-177.
- [11] Dewald, N. H. Transporting good library instruction practices into the web environment: An analysis of online tutorials. *The Journal of Academic Librarianship*. 1999, vol. 25, no. 1, p. 26-31.

付記

本発表は、放送大学大学院文化科学研究科情報学プログラム修士論文「大学図書館のオンラインビデオによる利用教育の現状と課題」(2021年度提出)の成果の一部である。

表 1：日本と米国のオンラインビデオの評価の比較調査結果

	評価指標	日本		米国		米国と日本の差(B-A) (パーセントポイント)
		本数	割合(A) (n=74)	本数	割合(B) (n=90)	
1	動画の時間が3分以内である	26	35.1%	40	44.4%	9.3
2	大学の授業や課題に関わることに言及している	9	12.2%	21	23.3%	11.2
3	具体例を紹介している	70	94.6%	78	86.7%	-7.9
4	動画内にブランドロゴが表示される	56	75.7%	70	77.8%	2.1
5	冒頭で動画の概要を述べている	61	82.4%	54	60.0%	-22.4
6	冒頭で動画の目標を述べている	13	17.6%	7	7.8%	-9.8
7	終盤で内容の要約を述べている	18	24.3%	14	15.6%	-8.8
8	重要な部分を見た目や動きで目立たせている	71	95.9%	88	97.8%	1.8
9	アニメーションを最小化している	51	69.9%	64	71.1%	1.2
10	専門用語が説明無しに使われていない	54	73.0%	53	58.9%	-14.1
11	図や画像を使用している	74	100.0%	90	100.0%	0.0
12	文字の使用を最小限にする	65	87.8%	83	92.2%	4.4
13	音声が使われている	66	89.2%	88	97.8%	8.6
14	母国語の字幕がある	4	6.1%	61	69.3%	63.3
15	外国語の字幕がある	6	9.1%	4	4.5%	-4.5
16	質問・発問・課題がある	13	17.6%	24	26.7%	9.1
17	補足情報の紹介やリンクがある	27	36.5%	34	37.8%	1.3
18	図書館への問い合わせ方法に言及している	2	2.7%	56	62.2%	59.5